

精神保健福祉現場実習における 学生の心理的变化に関する研究 ～実習前・中・後での測定結果の比較から～

大西 良・辻丸秀策・大岡由佳・藤島法仁・占部尊士
鋤田みすず・末崎政晃・津田史彦・福山裕夫

The mental changes of student's on psychiatric social worker training.

Ryo OHNISHI, Shusaku TSUJIMARU, Yuka OOKA,
Norihito FUJISHIMA, Takashi URABE, Misuzu SUKITA,
Masaaki SUEZAKI, Norihiko TSUDA, Hiroo FUKUYAMA

【抄録】本研究では、精神保健福祉現場実習での時間的な経過に伴う学生の心理的变化について、日本語版 POMS と日本語版 STAI の両尺度を用いて検証することが目的であった。調査の結果、①実習生の状態不安については、実習前と実習中で高値となっており、実習後に急激に減退すること、②実習生の気分状態については、「緊張-不安」、「怒り-敵意」、「活気」、「疲労」、「混乱」の5つの下位尺度で有意な変化がみられ、特に「緊張-不安」と「怒り-敵意」では、実習が経過するにしたがって有意な低下がみられること、③実習中の STAI 状態不安を3群に分けて（高位群・中位群・低位群）、日本語版 POMS の下位尺度との関連をみたところ、「抑うつ-落ち込み」、「活力」、「混乱」の3つの下位尺度で有意な関連がみられ、いずれも高位群で否定的な感情が高値になること、が示された。

以上の結果をもとに、実習場面での学生の心理的变化に注目した情緒的支援の重要性ならびに、具体的な支援の在り方について考察したことを記した。

【キーワード】精神保健福祉現場実習 実習生の心理状態 時間的変化

1. はじめに

1997(平成9)年12月に精神保健福祉士法が成立し、Psychiatric Social Worker(以下 PSW と略す)が「精神保健福祉士」として資格化されてから9年(平成18年現在)が経過した。国家資格化がなされる前から、PSW が精神科医療の現場あるいは社会復帰施設などにおいて精神障害者の福祉的支援に関わる重要な役割を果たしていたが、荒田¹⁾は、国家資格化以前と比べて精神障害者の福祉的支援の質の向上が図られ、精神科医療と地域リハビリテーション、社会復帰に関する円滑な連携がなされるようになったと報告している。また、宮崎²⁾は、国家資格化に伴って精神障害者の平均在院日数の減少や精神障害者の生活の質の向上が大いに期待されるととも

に、精神障害者の社会資源の増加や生活場面の広がりによって精神保健福祉士の職域も拡大していくと述べている。このように、国家資格化されたことによって、精神保健福祉士の資質について明確な基準が設けられたといえる。

その一方で、精神保健福祉士を養成する教育機関が、年々増加を続けている今日、学生の資格取得のための養成教育なのか、利用者にとって望まれる人材育成のための養成教育なのか、養成教育の方向性を見失いつつあるという指摘が様々な場面でなされている。例えば、小森³⁾は、養成教育が軽視され資格を取ることが目的化されると精神保健福祉士の利用者不在の専門性が助長されると指摘し、また、西澤⁴⁾は国家資格取得にばかりに気を取られた教育では、利用者支援の空洞化が進むと危惧している。こ

のように、精神保健福祉士の養成において、専門職としての価値を自覚して、現実実践能力を身につけた専門家の養成が求められているといえる。

さて、先述したような現状の中、養成機関では、養成カリキュラムの検討や実習指導のあり方など養成教育のあり方や具体的な指導方法について、多くの研究者によって調査、研究がなされている。

しかしながら、精神保健福祉現場実習での学生の心理的側面に着目した研究は数少なく、学生の心理的变化について科学的な指標を用いて検証した研究は皆無であり、科学的根拠に基づき実習生の変化を明らかにすることは大変意義あるものだと考える。

そこで本研究では、精神保健福祉養成課程の学生を対象に、精神保健福祉現場前、中、後の3時点での不安感ならびに気分状態について測定することで、学生の心理的状态が時間的な経過によってどのように変化するのかを検証することを目的とした。

2. 対象と方法

1) 調査対象

本研究について主旨を説明し同意の得られた、精神保健福祉士養成課程の4年生15名を対象にした。

2) 調査時期

調査は、2006年5月～9月にかけて個々の実習時期に合わせて実施した。

3) 調査内容

本調査に用いた質問紙は次の2種類である。

(1) 不安の測定

水口ら⁵⁾によって日本語版に翻訳された Spielberger⁶⁾の State-Trait Anxiety Inventory (以下 STAI と略す)を用いた。STAI は測定時点での不安の強さを示す「状態不安」と、性格特性としての不安になりやすさを示す「特性不安」を分けて評価することができる。判定方法は20項目の質問ごとに4段階の尺度(状態不安尺度:「全く違う」, 「いくらか」, 「まあそうだ」, 「その通りだ」), (特性不安尺度:「ほとんどない」, 「たまに」, 「しばしば」, 「しょっちゅう」)のうち、いずれかの回答を1つ選択させて、得点化(1～4点)した。したがって、

状態不安尺度、特性不安尺度の各々において合計得点が高いほど不安が高いことを示す。

(2) 気分状態の測定

気分状態の測定には、日本語版 POMS (Profile of Mood States)を用いた。これは McNair⁷⁾が開発したもので、横山⁸⁾がこの質問紙の日本語版を作成し、妥当性・信頼性を確認している。POMS は6つの気分あるいは情動的状态を同時に測定できるという特徴がある。この6つの下位尺度とは、①緊張-不安 (Tention-Anxiety), ②抑うつ-落ち込み (Depression-Dejection), ③怒り-敵意 (Anger-Hostility), ④活気 (Vigor), ⑤疲労 (Fatigue), ⑥混乱 (Confusion) のである。質問項目は全部で65項目あり、各質問はいずれも身近な形容詞からなる。評定は0点から4点の5件法で行い、尺度ごとに項目得点を合計する。したがって、得点が高いほどそれぞれの状態が高い。

4) 統計的解析法

まず、有効回答者の日本語版 STAI の得点と日本語版 POMS の得点を求め、正規分布であるか否か、Shapiro-Wilk の正規性の検定を行った。また、日本語版 STAI の状態不安については、上位群、下位群、および平均得点付近の中位群を抽出して、3群分けを行った。検定方法については、日本語版 STAI および日本語版 POMS の時間的な変化を明らかにするために、それぞれ対応のある t 検定を行った。さらに、群分けをした日本語版 STAI の状態不安と日本語版 POMS との関連を明らかにするために、日本語版 POMS の下位尺度を目的変数とする一要因の分散分析を行い、その後、多重比較を用いた。

なお、一連の集計および統計処理には、統計パッケージ SPSS11.0J for Windows を用いた。

5) 倫理的配慮

調査対象者に対しては、調査への協力依頼文書の中で、精神保健福祉現場実習をより効果的に進めるための調査である旨を伝え、本調査はあくまでも任意であり、成績や実習評価とは一切関係のないこと、回答結果はコンピュータ処理され、個人の回答が外

部に知らされることなく、結果は学術的な目的以外には使用しないことを明記した。

また、調査に協力してもらった学生に対しては、個別に調査結果をフィードバックして、実習後での自己評価や振り返りなどの自己学習の一指標として役立ててもらった。

3. 結果

1) 実習生の不安感の時間的変化について

実習生の実習前・中・後の3測定時点での日本語版 STAI 状態不安の平均値を Fig. 1 に示す。

この3時点の平均と標準偏差については、実習前で 57.38 ± 10.49 (M \pm SD), 実習中で 56.69 ± 10.59 (M \pm SD), 実習後で 42.92 ± 9.42 (M \pm SD) であった。

この3時点の平均値の変化についてみると、実習前と後の間 ($t(14)=4.24$ $p<.01$), 実習中と後の

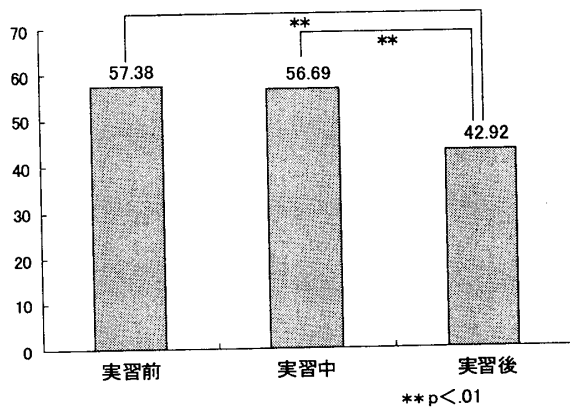


Fig. 1 実習生の不安感の時間的変化

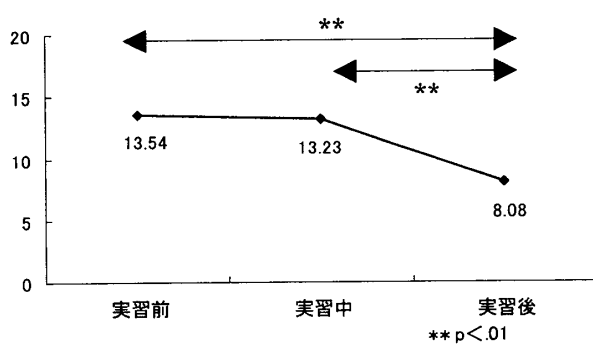


Fig. 2 POMS (緊張-不安) の変化

間 ($t(14)=5.19$ $p<.01$) で有意に低下していることが明らかになった。つまり、実習前で不安がもっとも高くなっており、実習後には実習前と実習中の2時点に比べて、大きく不安感が低下していることが示された。

2) 実習生の気分状態の時間的変化について

ここでは、実習前、中、後の3時点での日本語版 POMS の下位尺度の状態とその変化について示す。

まず、「緊張-不安」では、実習前 13.54 ± 4.81 (M \pm SD), 実習中 13.23 ± 4.51 (M \pm SD), 実習後 8.08 ± 4.99 (M \pm SD) であり、差の検定の結果、実習前と後の間 ($t(14)=4.94$ $p<.01$), 実習中と後の間 ($t(14)=3.14$ $p<.05$) で有意な低下がみられた (Fig. 2)。

「抑うつ-落込み」では、実習前 5.69 ± 4.91 (M \pm SD), 実習中 5.92 ± 4.46 (M \pm SD), 実習後 3.92 ± 3.75 (M \pm SD) であり、差の検定の結果、有意差のある変化はみられなかった (Fig. 3)。

「怒り-敵意」では、実習前 3.31 ± 2.84 (M \pm SD), 実習中 2.62 ± 2.47 (M \pm SD), 実習後 1.62 ± 2.14 (M \pm SD) であり、差の検定の結果、実習前と後の間 ($t(14)=2.19$ $p<.05$), 実習中と後の間 ($t(14)=2.66$ $p<.05$) で有意な低下がみられた (Fig. 4)。

「活力」では、実習前 5.62 ± 3.02 (M \pm SD), 実習中 7.31 ± 3.09 (M \pm SD), 実習後 9.00 ± 4.00 (M \pm SD) であり、差の検定の結果、実習前と後の間 ($t(14)=2.67$ $p<.05$) で有意な上昇がみられた (Fig. 5)。

「疲労」では、実習前 9.31 ± 5.01 (M \pm SD), 実習中 10.46 ± 4.14 (M \pm SD), 実習後 7.85 ± 3.87 (M \pm SD) であり、差の検定の結果、実習中と後の間 ($t(14)=3.02$ $p<.05$) で有意な低下

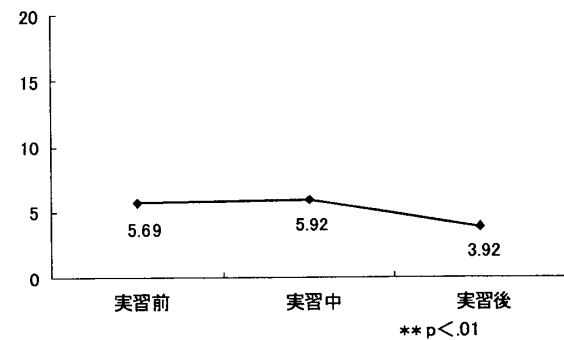


Fig. 3 POMS (抑うつ-落込み) の変化

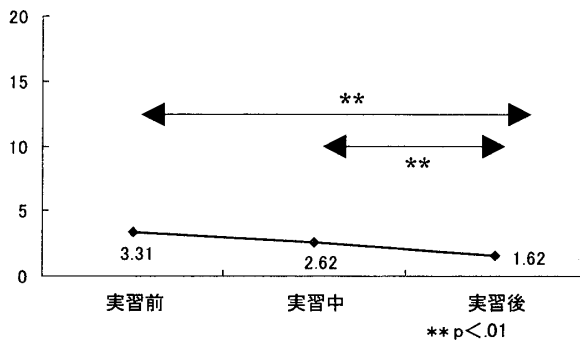


Fig. 4 POMS (怒り) の変化

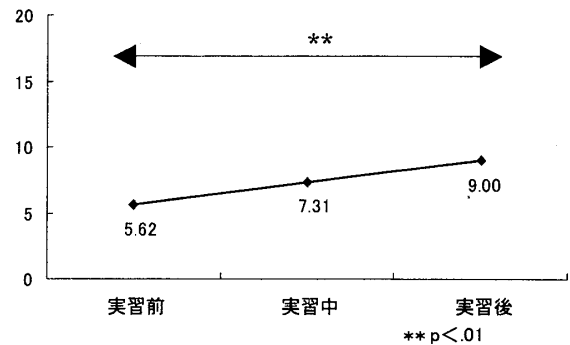


Fig. 5 POMS (活力) の変化

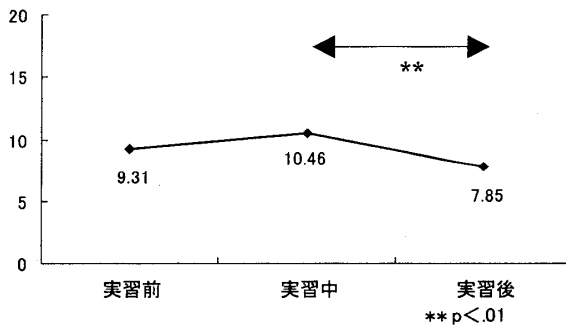


Fig. 6 POMS (疲労) の変化

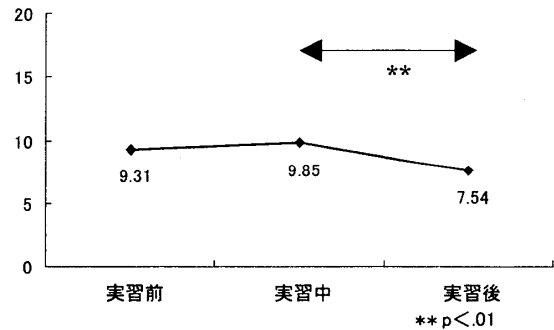


Fig. 7 POMS (混乱) の変化

がみられた (Fig. 6)。「混乱」では、実習前 9.31 ± 3.88 ($M \pm SD$)、実習中 9.85 ± 4.71 ($M \pm SD$)、実習後 7.54 ± 3.26 ($M \pm SD$)であり、差の検定の結果、実習中と後の間 ($t(14) = 2.50$ $p < .05$) で有意な低下がみられた (Fig. 7)。

以上のことをまとめると、「緊張-不安」と「怒り-敵意」の2つの気分状態は、実習前で最も高く、時間が経過するに従って低下していくこと、「疲労」と「混乱」は、実習中に最も高く、実習中から実習後にかけて低下していくこと、また、「活力」は実習後に最も高く、実習が経過していくにつれて増加していることが示された。

3) 実習中の日本語版 STAI 状態不安と日本語版 POMS との関連について

つぎに、実習中の状態不安について、平均値を中心とした正規分布を示していたため、低位群を36~51点 (30.8%)、中位群56~61点 (38.4%)、高位群63~73点 (30.8%) の3群に分けた。

この3群と日本語版 POMS の下位尺度との関連

をみると、「抑うつ」($F(1,13) = 4.74$ $p < .05$)、「活力」($F(1,13) = 5.44$ $p < .05$)、「混乱」($F(1,13) = 6.76$ $p < .05$) の3つの下位尺度で有意な関連が認められ、その後の多重比較の結果、「抑うつ」「混乱」は高位群で、「活力」は低位群で高いスコアを示していた (Table. 1)。

つまり、状態不安の高い学生で抑うつ気分が強く、混乱する傾向にあること、また、状態不安の低い学生で活力を持つことができていることが明らかとなった。

4. 考察

1) 実習生が抱く不安感の時間的変化について

本研究では、各実習時期 (実習前、中、後の3時点) での実習生の不安感を測定した結果、不安は実習前に最も強くなり、その強い不安感は実習中も持続していること、また、実習後には不安感は半減することを明らかにした。

実習生の不安感をテーマにした先行研究の多い看

Table.1 実習中の状態不安とPOMSとの関連

		平均値	標準偏差	F値	有意差	多重比較 (TukeyHSD法)
緊張	低位群	9.25	4.50	3.02	n.s.	
	中位群	14.75	2.63			
	高位群	15.20	4.21			
抑うつ	低位群	2.25	2.63	4.74	p<.05	高位群>低位群
	中位群	5.25	1.50			
	高位群	9.40	4.88			
怒り	低位群	0.75	1.50	2.85	n.s.	
	中位群	2.50	1.92			
	高位群	4.20	2.68			
活力	低位群	10.50	2.89	5.44	p<.05	低位群>高位群
	中位群	6.25	2.36			
	高位群	5.60	1.82			
疲労	低位群	7.75	3.20	1.55	n.s.	
	中位群	10.75	4.35			
	高位群	12.40	4.16			
混乱	低位群	6.00	3.83	6.76	p<.05	高位群>低位群
	中位群	8.50	1.29			
	高位群	14.00	4.00			

護実習では、例えば、岡野⁹⁾や藤田¹⁰⁾は、実習に臨む直前の学生の不安感はとても高く、実習終了後にはもとの状態まで低下することを明らかにしている。野中ら¹¹⁾は、実習開始1日目では、はじめて患者に接するため不安や緊張が上昇するが、その後現場に入り様々な体験をすることで不安が急激に減少することを報告している。また、佐藤¹²⁾は、実習初日に不安は最大となり、不安の高い状況は実習3日目まで続くことを示している。本研究においても、学生の不安感は時間的経過に伴って変化しており、特に実習前から実習中にかけては高い不安状態が持続していることは、看護実習の研究結果と近似するものであるといえる。

このように、実習前から実習中にかけて不安感が高値となる理由として、野中ら¹³⁾が、「実習初期では、はじめて会う患者に接する不安や緊張が直接体験を契機に上昇するものと考えられるが、先入観や固定観念に根ざすと考えられる悪い印象が、現場に入り好ましい体験をすることによって氷解して、不安が急激に減少する」と指摘してするように、実習直前から実習初期にかけては、実習に対する恐怖心や先入観などによって不安が増幅されるが、実際にクライアントや病院スタッフ、実習指導者と関わる中で、そのような不安要因が取り払われ、順応してい

くことで不安が低下したと推測することができる。

また、著者らの研究¹⁴⁾では、実習中の不快体験の有無と不安感との間に有意な関連がみられ、不快と感じる経験を持つ実習生で強い不安感を抱えていることが示されており、再度実習で不快な体験をするのではないかという予期不安によって不安の増大がみられたとも考えられる。断定することはできないが、特に、実習生は実習指導者の言動に大きな影響を受けており、現場指導者の「冷たい態度」「無関心」「他の学生との比較」などを不快だと感じているため、現場指導者を含めた実習環境が不安感の増減と関係していると推測できる。

2) 実習生の気分の時間的変化について

本研究では、実習生の気分状態は時間経過に伴って複雑に変化しており、特に緊張感を除く否定的な感情については、実習中で最大になっていることが明らかにした。

実習生の心理的側面を検討した研究では、例えば、三木ら¹⁵⁾は看護学生を対象に日本語版 POMS を用いて実習生の気分状態を測定した結果、実習中期において「緊張-不安」「抑うつ-落ち込み」「怒り-敵意」「疲労」「混乱」の得点が最も高くなることを報告している。また、布施ら¹⁶⁾は看護実習生の気

分状態は、実習前に比べて実習中に消極的な感情の得点が高くなり、時間が経過するに伴って徐々に低下していくことを示している。本研究結果もこれら看護実習の先行研究で示されている結果と酷似するものとなった。このように実習中に否定的感情が最大となる理由については、何が影響しているのか特定することはできないが、実習の場に馴染むことが関連していると考えられる。なぜならば、精神保健福祉現場実習の実習形態の特徴として、数ヶ所の部署や施設をローテーションする巡回型実習を行うことが多いことである。予備調査では、実習生1名当たり3から4ヶ所の部署を廻っていた。佐藤¹⁷⁾は、学生の実習中の不安を高める要因として、「環境変化や新しい対人関係の構築に対する不安」を挙げている。また、堤¹⁸⁾は、実習時の知識や技術量に加えて、実習生の社会的能力が不安と密接に関係していること、さらに、廣瀬ら¹⁹⁾は、実習現場の物的・人的環境の影響が学生の緊張感を急増あるいは急減させる可能性を持つと報告している。このように先行研究からも、実習生が実習環境に順応できる十分な時間が必要であり、その時間を十分に取れなかった場合、抑うつ感や疲労感などの消極的な感情が増大すると考えられる。

今後は、実習形態と実習生の気分変化との関連について検討していくこと必要であり、課題となった。

3) 実習生の心理的側面を考慮した実習巡回について

ここでは、本研究で明らかになった内容を踏まえて、教員の実習巡回時にできる情緒的支援について

述べる。

そもそも、実習巡回は「現場実習にあたって準備してきた実習計画に沿って専門職としての成長が図れているのかということの確認の支援であり、実習目標や達成課題に向けた支援の場」²⁰⁾という目的がある。これには当然、学生への情緒的支援も含まれる。では、いつの時点で実習巡回を行い、どのような情緒的支援が可能であるのか。本研究の結果でも示したように、実習生の否定的感情は実習初期に増大する。したがって、実習初期の実習巡回では、実習生の不安感や疲労感などに十分に配慮して実習生の訴えに耳を傾け、カウンセリング的に実習生の気持ちを受け止めるような支援が必要であろう (Fig. 8の巡回時期①)。また、実習後半には否定的感情は低下し、活力を感じる時である。そのため、この時期の実習巡回では、学習を促進させるように課題整理や実習目標の再確認などを行って、活力を維持させる情緒的支援が必要になると考える (Fig. 8の巡回時期②)。このように、実習生の否定的感情の変化に焦点を当てて、巡回指導を行うことによって、より効果的な学習に繋がるものだと考える。

5. まとめ

本研究の目的は、精神保健福祉現場実習での時間的な経過に伴う学生の心理的变化について検証することであった。その結果、実習生のSTAI状態不安は実習前で最も高く、時間が経過するにつれて低減されることが明らかとなった。特に、実習前と実

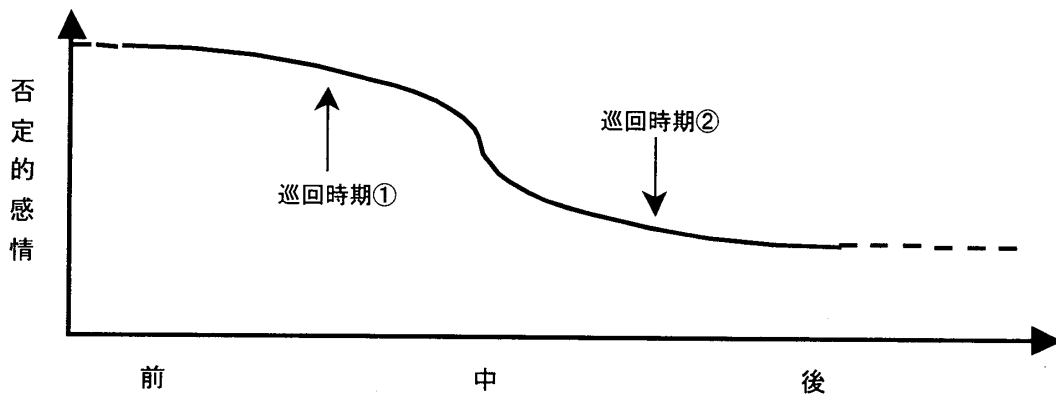


Fig. 8 実習生の否定的感情と実習巡回時期のイメージ

習後を比べると、半減していることが分かった。また、実習生のPOMS気分状態については、「緊張-不安」と「怒り-敵意」の2つは、実習前で最も高く、時間が経過するに従って低下していくこと、「疲労」と「混乱」は、実習中に最も高く、実習前から実習後にかけて低下していくこと、また、「活力」は実習後に最も高く、実習が経過していくにつれて増加することが示された。状態不安と気分との関連では、実習前と実習中期の2つの時期での状態不安と気分状態との間に有意な関連がみられたものの、実習後は状態不安との関連はみられなかった。つまり、実習前および中期に学生が感じる不安感気分と密接な関係をしていることが明らかとなった。

文献

- 1) 荒田寛：「精神保健福祉援助実習」への期待と今後の検討課題。精神保健福祉，2001；第32巻第1号（通巻45号）：9-12。
- 2) 宮崎まさ江：教育機関における「精神保健福祉援助実習」教育のあり方と今後の課題。精神保健福祉，2001；第32巻第1号（通巻45号）：19-24。
- 3) 小森涼子：PSWとしての私を支えてきたもの。精神保健福祉，2005；第36巻第2号（通巻62号）：107。
- 4) 西澤利朗：協会存続の危機～衝撃と再出発～。精神保健福祉，2004；第35巻第2号（通巻58号）：119-122。
- 5) 水口公信，中里克治：新しい不安尺度 STAI に本番の作成～女性を対象とした成績～。心身医学，1982；第22巻第2号：108-112。
- 6) Spielberger, C.D：日本版 STAI 状態・特性不安検査使用手引き。1990；三京房。
- 7) McNair DM, Lorr M, Droppleman LF: Profile of Mood States. San Diego, Educational and Industrial Testing Service, 1992
- 8) 横山和仁：POMS 手引き。金子書房，1997。
- 9) 岡野理恵：基礎実習における学生の不安の変化に焦点をあてた実習指導。第22回日本看護学会集録（看護教育），1991：38-41。
- 10) 藤田美津子：初めての臨床実習を前にした看護学生の不安～学習への動機づけとして～。看護展望，1995；第21巻第3号：98-108。
- 11) 野中絹代，蔵重幸子，松浦康代，上野智子：精神科実習に対する看護学生の不安の変化～VTR 視聴前後および実習期間中の変動パターンとその影響要因に関する検討～，日本看護学教育学会誌，1997；第7巻第1号：21-31。
- 12) 佐藤信枝：臨地実習前の不安要因と STAI との関連～基礎看護学実習の学生を対象として～。新潟青陵大学紀要，2002；第2号：39-45。
- 13) 前掲書 11)
- 14) 大西良：学生の実習経験からみる現場指導者の様相～学生の情緒的側面に着目して～。久留米大学大学院比較文化研究論集，2006；第19号：27-38。
- 15) 三木明子，前島宏之：看護学生における実習中の気分の変化～POMS 短縮版による検討～。第35回日本看護学会抄録集（看護総合），2004：5。
- 16) 布施敦子，大佐賀敦：臨床看護実習に伴う看護学生の疲労感と STAI 特性不安との関連。日本看護教育学会誌，2000；第10号：11-20
- 17) 前掲書 12)
- 18) 堤由美子：臨床実習用ストレス質問紙（CSQ）の日本語版の開発。日本看護研究学会雑誌，1994；第17巻第4号：17-26。
- 19) 廣瀬規代美：臨床看護実習における学生のストレス～心理的・身体的ストレス反応の時系列的変動から～。群馬県立医療短期大学紀要，1996；第13号：7-17。
- 20) 岡田良浩：精神保健福祉士養成講座8「精神保健福祉援助実習」第4章。中央法規出版，2004：208-211。